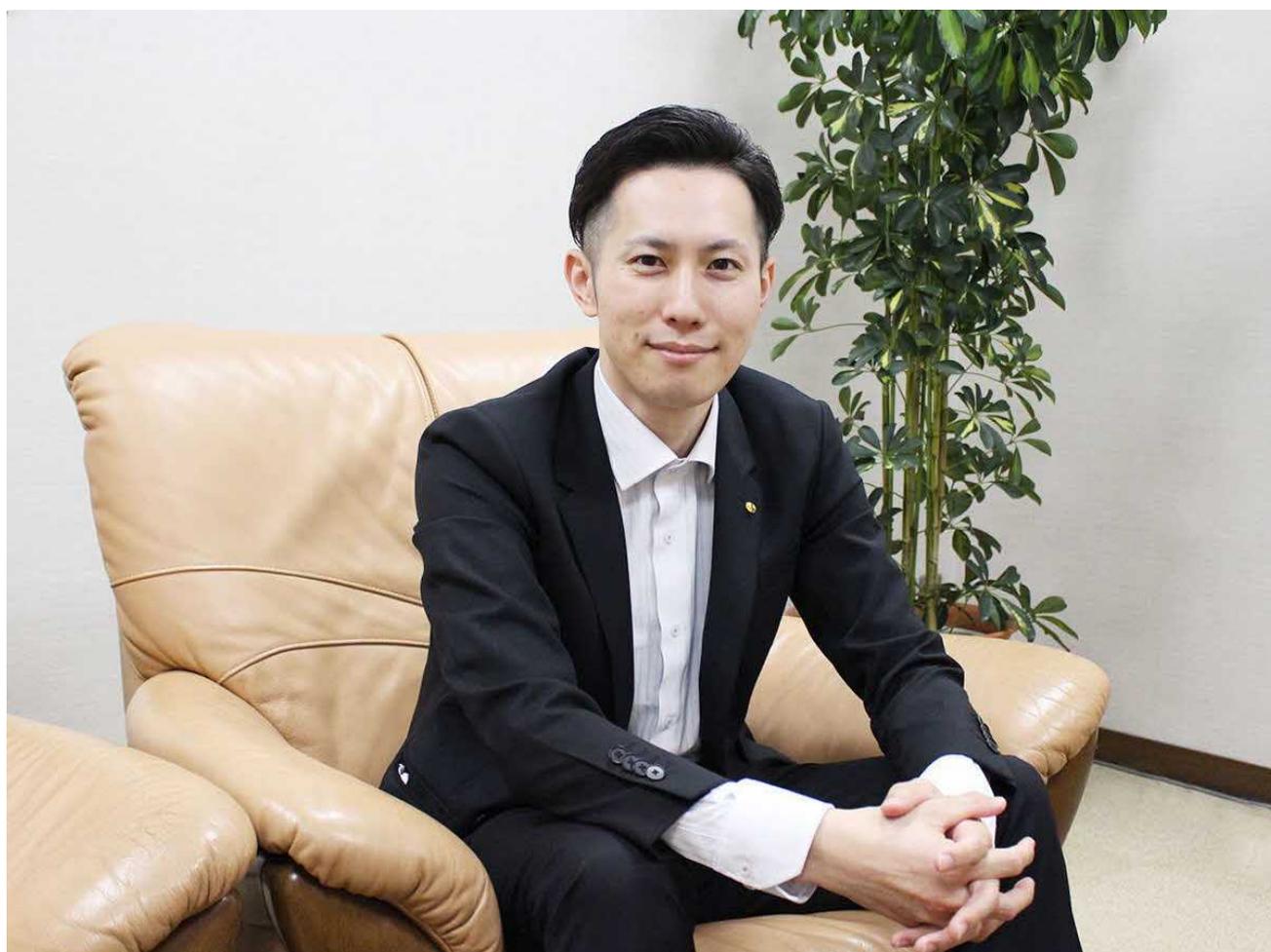


株式会社日本海コンサルタント
薄井 聖さん

【お子さん】令和5年2月生まれ
【育休取得期間】1か月

育児と仕事が円滑に進められるよう、夫婦間でも組織内でもコミュニケーションを大切にしたい



—育休を取ろうと思ったきっかけを教えてください。

私は今年で入社7年目になりますが、入社したときにはすでに多くの先輩が育休を取っていました。男性でも育休を取得することが当たり前の雰囲気なので、きっかけという特別なものはなく、迷うことな

く取得を決めました。少し前には先輩が第3子のお子さんで取得しています。私自身も第1子に限らず第2子以降も育休を取得したいと思っています。社内に経験者が多いので、「育休ってどんな感じですか?」「こんな感じだったよ」「取った方がいいよ」などの話ができるのは助かります。社長や上司たちも明確に「取りなさい」と促してくれるのがありがたいですね。

—取るのが当たり前の雰囲気はいいですね。

当社の男性の育休取得者は18名にのびります。これだけ増えてくると、「上司に言い出しにくい」などの悩みを抱える必要がないので気持ちの面で安心できます。男性育休を始めたばかりの会社はそこまで持っていくのが大変かもしれないですね。育休前には総務部と面談があり、どのタイミングで給付金が入ってくるか、申請する上で必要な書類は何かなど、分かりやすい資料を作って説明してもらったので不安もありませんでした。

育休の時期は、会社の繁忙期と重ならず、なおかつ妻の要望に応えられるタイミングに合わせました。妻に育休の話をしたとき、「ありがとう。育休が取れるなんていい会社だね。」という喜びの反応とともに、「希望を出せるなら、(時期は)生まれてすぐじゃなくて1か月ずらして(取って)ほしい」と言われました。産後1か月間、妻は実家で過ごす予定だったので、自宅に戻ってきてからじゃないとせっかく育休を取っても意味がないと。確かにその通りで、妻が金沢市内の実家に里帰りしていたときには、頻りに顔を見に行くようにして、妻と子どもが自宅に戻るタイミングで育休をスタートしました。

たまに会社から連絡がくると、つながりを感じられてうれしかった

—仕事の引継ぎはスムーズにできましたか?

仕事をため込んだまま離れるわけにはいかないので、できる限り業務処理を済ませていきました。社内だけではなくお客様にも協力を仰ぎました。一時期担当が変わることを伝えなければならないので。社内では基本的に2~3人のチーム体制で仕事をしているので、互いにカバーし合えるのは利点だと思います。

育休に入ったばかりのころは仕事をしていないことに違和感がありました。子どもの世話をしているも「今頃みんな仕事してるのかなあ」なんて考えてしまったり。心の半分が会社にあった気がします。後半に差し掛かってからは子育てがだんだん大変になり、生活リズムも子ども中心になっていったので、仕事のことを考える時間も減りましたが(笑)。子育てのドタバタの中で、たまに問い合わせなどで会社から電話が来ると少しうれしかったですね。社会との関わりを感じられた気がして。仕事のことを完全に忘れたいという人も多いと思いますが、自分の場合は会社とつながっている実感がある方が落ち着きま

した。

—仕事から離れることに対する不安な気持ちも確かにありますよね。家事や育児はいかがでしたか。

学生時代から一人暮らしをしていたので家事には慣れていました。結婚してからも分担していたので、その点はまったく苦ではありませんでした。

育児に関しては、やってみて初めて分かることばかりでしたね。うちは男の子なんですけど、おむつ交換のときに予想以上におしっこを飛ばされてしまったり（笑）。ベビーベッドが全部濡れて、交換するのが大変でした。こんなにも勢いがあるんだなあ（笑）。沐浴も想像以上に重労働。子どもの頭を片方の腕で支えなくちゃいけないんですけど、これが疲れるんですよ。力の入れ方が下手なせいもあるんだろうけれど、女性だともっと大変なんじゃないかな。子どもの汗のかき方にも驚きました。空調に気を付けているつもりなのに、頭から何かが漏れたのか？と思うくらいびしょりですから。



（ご本人提供写真）

日ごろから周囲と良好な人間関係作りをしておくこと

—本当に育児ってやってみないと分からないですよね！

育休を取らずに話だけ聞いていたら、これら全部が他人事になっていたかもしれません。「2人の子もだから一緒にやろうね」と言ってくれた妻のおかげで、いろんな経験や新しい発見ができました。妻と一緒に家事や育児をこなした経験は、その後の生活にもプラスになっています。ちゃんと分担しなくちゃいけないという意識をしっかり持てたので、一度夫婦の間にリズムができたことで、育休後も2人で協力する体制が作れました。

—素晴らしいです。復職してからは順調ですか？

復職後は仕事と家事育児の両立ができるよう、コミュニケーションに心がけています。毎日を過ごしていく中で、子どものことで早く帰らなくてはいけない日もあれば、仕事の都合で遅くなる日もあります。夫婦間でこまめな報連相を重ねて、仕事と家庭がうまく回るように努めています。時間があれば昼休みにも妻とLINEのやり取りをして、子どもが遊んでいる様子や離乳食を食べている様子の写真を見ながら、家の状況を把握したりしています。

—コミュニケーションは確かに大切ですね。

日ごろから良好な（人間）関係作りをしておく、仕事と子育ての両方に活かされると思います。普段、会社の中で子どもや家族の話は一切してないのに、「子どもが熱を出したから帰ります」とはなかなか言い出しにくい。でも、日常的に子どもの話をしていれば、周囲に状況を分かってもらいやすい。何かあったときに、何気ない会話を通して培ったものが役に立ちます。

家の中でも同じことが言えます。妻には職場での話をいろいろしているので、「今日はどうしても遅くなる」と伝えたときに、理解が得られやすい。日ごろからの積み重ねがすべてだと思うし、だからこそコミュニケーションを大切にしていきたいです。



(ご本人提供写真)

トップが「どんどん取りなさい」と言ってくれると安心して取得できる

—まだまだ男性育休に消極的な組織もありますが、変わっていくといいですね。

自分より上の世代の男性上司たちに話を聞くと、「自分たちももっと子育てに関わりたかった」と話してくれるんですね。かつて「男は仕事だけしていればいい」という時代背景の中で、仕事一辺倒で働いてきた年代の方たちも、きっといろんな思いを抱えていたんじゃないかと。この会社では、上司たちが「自分たちにはできなかったことを」と促してくれるのが本当にありがたいですし、また「そういう会社にならないと今後生き残っていけない」という意見も聞くので、なるほどと感じています。確かにあらゆる業種で人材不足が懸念される中、企業としての生き残りの側面もあるのかもしれませんが、いずれにしても、人が大切にされる社会に変わっていくといいなと思っています。

組織の風土を変えていくためにはやはりトップの意識改革が重要になってくるのではないのでしょうか。

「どんどん取りなさい」という雰囲気を出してくれると、「それじゃあ」と安心した気持ちになるので。私自身、育休に入るときは「行ってきます！」という気持ちで取れました（笑）。振り返ってみると、みんなのおかげで育休を取ることができたんだなど実感しています。妻はもちろん、不在中にサポートに回ってくれた先輩や同僚、育休を促してくれた上司など、周りの環境に感謝するばかりですし、いずれは自分もサポートする側に回って貢献したいと思います。

取材・編集／子育て向上委員会 長谷川由香